

お  
文  
の  
影

つい一昨日、九月の十三夜の話だという。

語る老人は、忙しくまばたきをしながら、

「なあに、ただの見聞違いに決まっただけなんです」

と、さして長くもない話の間に三度も断りを入れた。その様子に、政五郎はかえって老人の不安を濃く感じ取ってしまった。

老人は深川北六間堀町の剛衛門長屋に住む左次郎という隠居である。日本橋の糸問屋に長年奉公し、三代の主人に番頭として仕えたが、先年輕い卒中を患って右足がきかなくなり、それを汐に奉公から退いた。忠勤一筋で女房ももらわず、子もおらず、生家は離散し兄弟姉妹の消息も知れない彼は、天涯孤独の病身である。

忠義の元番頭に、奉公先も無下にはしかねたのだろう。彼に今の住まいを世話し、月々いくらかの金をくれて、暮らしが立つようにしてくれた。本人はそれには甘えず、足はいけなくとも手先は器用だからと、紙細工作りだの傘張りだの、細かな内職仕事を受けては糊口をしのいでいる。

政五郎が左次郎を知ったのは、半年ばかり前のことになるだろうか。一人住まいの老人と岡っ引きの出会いだからといって、何も険しい仔細があったわけではない。たまたま政五郎が近くを通りかかった折、剛衛門長屋の木戸のところに、子供が大勢集まって楽しみに騒いでいるので、何事かとひよいとのぞいてみたら、子供らの輪の真ん中にこの老いた元番頭がいたのである。

そのとき左次郎は子供らに、手作りの紙人形芝居を見せていた。芝居には疎い政五郎でもひと目でそれと見当のつく、仮名手本忠臣蔵の一場面である。しかも紙人形の装束ときたら市村座もかくやの出来栄で、政五郎は大いに感心した。いったいこの爺様は何者かと興味を惹かれ、子供らが去ったあと訪ね直して、思いがけず彼の身の上話を聞くことになったのだ。

左次郎が仕えた糸問屋の代々の主人は、揃いも揃って芝居道楽であったという。その熱の上げ様に、連れ合いや子供たちもかぶれてしまう。そして彼らがこぞって奉公人たちにも芝居の話をし、名台詞や名場面を再現して語り聞かせ、気の利いた受け答えがあれば喜んで褒美を与えるという気風だから、

「和やかなのは良かったです、芝居嫌いに勤まるお店ではありません」

左次郎は笑って言った。

それだから、彼は最初耳学問で芝居を覚えた。覚えがいいので主人は喜び、彼が番頭になる

と、芝居見物のお供を命じるようになる。どんな道でも同じだが、好き者というのは教え好きでもあり、左次郎の主人は、本物の芝居を知り初めしばかりの彼に、あれやこれやと薫陶をほどこすのが楽しくて仕方がなかったのだろう。主人が代替わりしても事情は同じだ。時代によって、役者も変わるし演目も増える。

こうして、お店を退くころの左次郎は、いっぱしの芝居通になっていたのである。

紙人形は、内職の余り物の木っ端や紙切れを工夫して作った。最初はただ手慰みに作っていただけだが、近所の子供が珍しがるので、いくつかやったり、謂れを聞かせてやったりしているうちに、せがまれて筋書きや所作をつけるようになっていった。すると自然に、もつといいものを作ろう、もつと凝ろうという欲が出てくる。覚えの早い子供がいれば嬉しくなる。

「今度は手前が旦那さま方をなぞったようになってしまいました」と、老人は照れる。

政五郎が見かけたときは、初めてひと幕通しで見せており、だから紙人形の造作にも気合いが入っていたのである。

子供らは左次郎を「さあ爺」と呼び、たいそう懐いている。子供らが世話になっているから、長屋の連中も左次郎を大事にしてくれる。淋しく枯れる一方になるはずだった独り住まいは、どうしてどうしてにぎやかに明け暮れているのだった。羨ましいような良い話だと、政五郎は女房に言ったものだ。以来、折あらば剛衛門長屋に立ち寄っては、老人と子供らが楽しげにしている様子をながめて、何か温かいものでも懐に抱いたような気分を分けてもらっている。その左次郎のところから、長屋の子供が使いにやつて来たのは昨日の昼前である。寺子屋の

帰りだというその子は、さあ爺が、ついでのときでいいから親分さんにお目にかかりたいと言っていると、政五郎の思い込みもあるのだろうが、やけに芝居の台詞めいた抑揚でたいそうに伝えてくれた。

政五郎が剛衛門長屋へ出向いていくと、これも長屋仲間の大工が作ってくれたという背もたれにもたれて、左次郎は新しい紙人形を作っているところだった。豪勢な打掛を着たお姫様だ。次は娘道成寺ですか——と問いかけると、ああこれはとにわかに座り直そうとしたのを制して、政五郎は上がり口に気軽に座った。

「手前のような者が親分さんをお呼びたてするなど、めつそうもないことです」

左次郎は不自由な身体で頭を下げる。「そんな氣遣いは無用ですよ。私らは御用聞きというくらいだ。御用とあらば、何処へでも参上します」

左次郎の幸せな暮らしに安心しきっていた政五郎は、このとき老人の顔を見るまで、彼に呼ばれた用件を深く考えていなかった。だが、日頃は、皺こそ多いが目は澄んで輝き、いきいきとしている左次郎の顔が、どうにも暗く翳っている。それに気づいて、政五郎はいったん腰を上げると、開け放しになっていた戸口の障子を静かに閉めた。

「どうなさいました」

水を向けると、老人は言い出す前に薄いくちびるをぐっと嚙んだ。作りかけの紙人形を脇に置く手がのろのろとしている。

「突拍子もないことを言う年寄りだと思われられるかもしれませんが——」  
そうして語り出したのである。

先の十三夜。明るい月の光の下で、剛衛門長屋の子供たちは影踏みをして遊んだ。  
「小さな子供らのなかには、手前の足がきかず、歩けないということが、まだよくわからない子もおります」

動かない右足を瘦せた手でゆつくりとさすりながら、左次郎は言った。  
「さあ爺、一緒に影踏みをしようと誘いに来るんでございますよ。それは手前にも嬉しいこと  
で、ああこの足が動いたなら、子供らに混じって影を踏んだり踏まれたり、遊びまわることが  
できるのにも思います」

左次郎は子供らに手伝ってもらい、長屋の木戸の脇に空き樽を据え、道で遊ぶ子供たちを見  
物することにした。影踏みは、左次郎の言うとおり、追いかけてこをしながら互いの影を踏ん  
で、踏まれたら鬼になり、また踏み返すという遊びである。影踏みの歌をうたいながら、子供  
らは熱心に興じる。

年長の子は足が速いし、頭も使うのでなかなか踏まれない。幼い子はどうしても不利で、す  
ぐ踏まれては鬼になる。度重なると、なかには泣き出してしまふ子もいるので、そのへんを加  
減してやるように教えながら、左次郎も楽しんでた。

そのうちに、いつも長屋の子供らのまとめ役をしている年長の子の様子がおかしいことに気  
がついた。  
吉三という十一歳の男の子である。父親は、左次郎の背もたれを作ってくれた大工で、自分  
もおとつちゃんのような腕の良い大工になるのだと張り切っている元氣者だ。少しそそっかし  
いところはあるが、小さい子の面倒をよく見ている。父母に言いつけられているのか、人形芝  
居や遊びがなくても、ほとんど毎日のように左次郎のところに顔を出して、さあ爺、何か用は  
ないかいと訊いてくれる。

「おいらはもうすぐ大工の見習いになるから、さあ爺と遊ばなくなるあ。さあ爺、淋しいか？」  
などと、子供らしい生意気な問いかけをしてるところなど、まだまだ幼くて愛らしい。  
その吉三が、どうかすると影踏みの足を止めて、地面ばかりに目を落としているのだ。下を  
向いたままきよるきよると周囲を見回したかと思うと、きゅっと頭を下げて走る子供らを睨む  
ように見る。そしてまたうろろと歩き出すのだが、すぐに止まってしまう。

最初は、年下の子供らにわざと影を踏ませてやっているのだらうと思っていた。が、他の子  
供らがわあっと別のところで騒いでいるときにも、吉三は離れて地面を見ている。自分の足元  
を見たり、仲間たちの影を見たりしている。少しずつ、遠巻きに。

吉三まで少し距離があつたので、左次郎はやや声を強めて彼を呼んだ。

「吉、どうかしたかい」

吉三はびくんと飛び上がった。左次郎は彼を手招きした。吉三は、なぜかしら足元の影を気  
にしなから、仲間たちの騒ぎを振り返り振り返り、左次郎のそばまでやってくるとしゃがみこ

んだ。

「どうしたんだね、おかしいよ」

左次郎が問うと、吉三はくしゃみをこらえているみたいなちんくしゃの顔をした。

「さあ爺、おいらは怖がりじゃないよな」

「何だね、急に」

芝居には因縁話や、人死にの出てくるものもある。左次郎はよくよく気をつけて、その手の演目を避けたり、細部を上手く変えるようにしてきた。それでも以前、あとでべそをかいた子供がいたというのを吉三から聞いて、以来、この子とはよく相談するようになった。

「女の子は怖がりだからね」というのが、吉三の口癖である。「おいらとかは、全然平気なんだけどさ」

「おまえは怖がりなんかじゃないよ。だけど今は、何かを怖がっているようだね」

左次郎に言われて、吉三は首を縮めた。

「さあ爺、笑わないか？」

「笑ったりしないよ」

長屋の子供らはひとかたまりになって、三軒先のあたりで影を踏んだり踏まれたりしている。影踏み遊びというよりも、取っ組み合いになりそうだ。わあわあと騒いでいる。

「おかしんだよ」吉三は小声で言った。

「何がおかしい」

「おいらの目」と、ごしごしと目をこする。「さあ爺、さつきからおいらの目には、影がひとつ多いように見えるんだ。みんなの数より、余分に影があるように見えるんだ。そんなこと、あるわけないよな？」

左次郎はまじまじと吉三の顔を見た。子供の目は、遊ぶ仲間たちの方へ釘付けになっている。こんなことを話しながら、懸命に数えているようだ。彼らの人数と——影の数を。

左次郎もそうしてみた。しかし年老いた彼の目では、入り乱れて駆け回る子供らの数も、ましてや彼らが地面におとす影の数も、とうてい見極めることができない。

だから吉三に聞いた。「どうだ、ここから数えてみたら、やっぱりひとつ多いかい？」

吉三は首を振る。「わかんねえや。さつきは確かに——」

ひとつ多かった、という。

「影だけ、ぼつんと離れて走ってたんだ。誰もいないのに、影だけが走ってたんだ。みんなの後を追っかけていたんだよ」

左次郎は水を浴びたようにぞうっとした。

「どんな影だった？ 男の子か、女の子か」

「わからねえ。けど、小さかったよ。おあきぐらいかな」

おあきというのは五歳の女の子だ。

二人は揃ってはしゃぐ子供らの方に目を向けた。息がきれたのか、立ち止まってひと息入れている。近所のおかみさんが一人二人顔をのぞかせ、何か笑いながら言っている。

ひい、ふう、みい。左次郎は大急ぎで子供らを数えた。剛衛門長屋の子供は十人だ。吉三はここにいるから、あすこには九人いるはずだ。間違いない。ちゃんと九人だ。

影は？ 子供らの足元に伸びる影。影踏み遊びに興じるうちに、月が高く昇って少し短くなってきた影——  
十ある。

左次郎はまばたきをした。数えなおす。いや、今度は九だ。ひとつ消えた。

「さあ爺」と、吉三が左次郎の袖を強くつかんだ。

子供らの誰もいない、近くの子供から三尺ほど離れた道の端に、小さな丸い影がひとつある。しゃがんでいる子供の姿だ——左次郎は思った。頭と、あれが肩の形じゃないか？

「吉三！」

呼んで、腕をとらまえようとしたり、だが一拍遅かった。吉三は矢のように走り、どぶ板の上の影に飛びかかった。両足で踏んづける。

と、その影はすりと逃げた。吉三の足元から、油が流れるように横に逃げて、月明かりに表長屋の二階家が落とす影のなかへ溶け込んでしまった。

吉三は息を切らしている。後ろ姿が強張っている。

「吉、戻っておいで」

左次郎は二度呼んだ。吉三は後ずさりしながら戻ってきた。影が消えた方向から、目を離すことができないのだ。

「お月様のいたずらだよ」

傍らにきた吉三の背中をさすってやりながら、左次郎は言い聞かせた。

「あるいは、おまえさんたちがあんまり楽しんで勝手に影踏みをしてるんで、剛衛門稲荷様が仲間入りなすったのかもしれないよ。ああ、きつとそうに違いはない」

剛衛門稲荷さんというのは長屋の由来になったお稲荷さんで、この道をいったすぐ角にある。

「お稲荷さんは影踏みなんかしないよ、さあ爺」と、吉三は震える声で言った。

「するかもしれないさ。変幻自在だ。女の子の影の形になって、遊びにいらしたんだよ、きつと」

左次郎は言い張った。老人の手に感じる吉三の背中が、冷たく汗ばんでいた。

政五郎はゆっくりとうなずきながら、話に聞き入っていた。

「いや、まったく、面目ないことで」

左次郎はしわしわと笑っている。

「手前まで吉三と一緒にあって、少しばかり震え上がってしまいました……」

「昨夜もいい月夜でした。子供らは影踏みをしましたか」

左次郎はかぶりを振った。「遊びたがりましたが、影踏みは十三夜だけのものだと言って、やめさせました」

そういう謂れがないわけではないが、遊びなのだから。月の冴えた秋の夜なら、いつやっ

もいいのだ。左次郎はやはり薄気味悪かったのだろう。

「吉三はまだ怖がっているようでござんすか」

「子供のことですから、ひと晩寝たら元気になったようです。ただ、他の子供らと違って、あの子は昨夜はもう影踏みをしように言い出さなかった。外にも出てきませんでした」

政五郎はもうひとつうなずいて、腕組みをした。

「気になる話だ」と言って、政五郎は微笑んだ。「それに左次郎さん、これは私のあてずっぱうだけれども、左次郎さんはまだ全部を話しておいでにならないような気がするんですよ」

左次郎ははっと面を上げた。擦り切れて、白髪がぼやぼやと浮いているだけの両の眉毛をぐいと持ち上げたので、顔の皺が深くなる。

「これはまた……」

「外れましたか」

「いえ、いえ」両手でつるつると顔を撫でる。

「親分の目はごまかせませんなあ」

実は、子供らの数と影の数が合わない——と感じたのは、十三夜の出来事が初めてではないのだと、左次郎は言った。

「もう先、二度ほど同じようなことがありました。そのときは、気付いたのは手前だけと思いません」

どちらも昼間のことで、寺子屋や家の手伝いを終えた子供らに、紙芝居人形を見せていると

きだつたという。

「数の合わない影があつたわけですか」

「はい。見間違いだと思いました。しかしそれも二度目には……」

それでなくても白つ茶けている左次郎の顔から、さらに色目が抜けたようだ。

「ですから一昨日の夜も、吉三がそれと言い出したとき、手前は頭から笑い飛ばしたりすることができなかつたのです」

顔を拭った手をおろし、その置き場所に困つたように宙に浮かせたまま、左次郎は政五郎に笑いかけた。

「手前は世間知らずのお店者でございます。一人前に歳だけは食っておりますが、実はお店のことしか知らずに老いぼれてしまいました」

へりくだってはいるが、愚痴っぽい口調ではない。

「こういふとき、その世間知の足りないことが仇になると、つくづく思いました。吉三が健気に顔には出さずとも、怖がっているのはわかります。何かと理屈をつけて、割り切れないのを割り切つてやろうと——あの影のひとつ多かつたのはこれこういう理由とか、巷に珍しい話じゃねえ、ほかにもそんな話もあるよ、あんな例もあるよなんぞと口説いてやろうと、手前なりにあれこれ考えたのですよ」

だがひとつも思いつかなかつたのだと、左次郎はうなだれる。

「剛衛門稲荷様だけじゃ、足りませんか」笑みを浮かべて政五郎は問い返し、自分で先を続

けた。「この長屋の子供らには、今さらお稲荷さんの話じゃ新味が足りませんか。それに、子供らに混じって遊びたがるのはお地藏さんと相場が決まっています、お稲荷さんじゃねえからな」

左次郎は「ほう」と口を開いた。

「お地藏様にはそういう謂れがあるんですか。そら、それですよ。手前はそういうことをまるで存じませんので」

それで政五郎の顔を思い浮かべたということなのである。

「差配さんに頼んで知恵を貸してもらおうかとも思ったんですが、手前はまだここでは新参者ですから、差配さんにお話ししたんじゃ、どうかすると剛衛門長屋にケチをつけているように聞こえるんじゃないかと気が引けてまして」

こういうところは、お店者らしい気配りである。少々気を遣いすぎている。

「お得意の、芝居の筋書きからは何か使えませんか」

「いやはや……見当たりません。なにしろおかしなお話ですから」

子供という本体はおらず、影だけが影踏み遊びにやってきた、と。

「よござんす」政五郎は腕組みを解き、ぽんと膝ひざを打った。「このところ御用は暇で、うちの手下たちもぼんやりしていたところだ。世間に似たような話がないか、謂れがないか、あたってみることにしましょう。なかなか面白そうですしな」

恐縮する左次郎を宥なだめて、政五郎は腰を上げた。

江戸の町は他所者よそものばかりの寄り集まったところだから、土地の古老などという気のきいた者はいない。政五郎自身も含めて岡っ引きというものも、殺風景な話やどろどろした話ならてんこ盛りに聞き知っているが、それ以外のところではとんと疎い。左次郎が、岡っ引きなら必ず見聞が広かろうと考えたのは、その意味で、やはりお店者らしいそそっかしさだ。

それでも政五郎には、吉三の心が静まる理屈や解釈を、たとえ作り話でもひねり出し、教えてくれそうなので、いくつかあった。

数日かけて、そういうあてをいくつかあたった。しかし目論見もくろみはことごとく外れ、政五郎が頼みにしたそれらのあては、みんなして首をひねる。

「へえ、そんな話を聞いたのは初めてです」

「そんなことがあるもんですかねえ」

「いやあ、初耳だ。子供の影だけが勝手に遊びに来たんでございますか」

そしてまた彼らは一様に、その子供の影は、きつと幽霊おんりかものけの類たぐいだろうという。政五郎としては、その解釈では吉三が（そして左次郎も）いつそう怖がるばかりだから別の解釈を探しているのに、あてがあてにならな

「幽霊じゃ困るんですよ」

「じゃあ、剛衛門長屋かその近所で、長いこと病で外に出られない子供はいませんか。その子の魂が遊びたがって、身体を離れて出てきたのかもしれない」



「離魂病ですか。それじゃ生霊いきりょうでしょう。幽霊と変わりないやね」

それでも一応聞き合わせてはみたのだが、そんな子供は近所にいやしねえ。

難儀なもんだと頭をかいていたところに、深川で棟梁とうりょうを張って三代目というある大工の親方が、ひよんなことを教えてくれた。

「剛衛門長屋てえのは、まだ新しいでしょう。建って二年かそこらだね」

親方の言うとおりである。が、火事の絶えない江戸では珍しいことではない。

「あすこはね、その前は長いこと空き地だったんでさ。そうさな十年……いや二十年は空いてたでしょう。親分だつて覚えがありませんか」

本所深川ほんじよを縄張なまとする政五郎ではあるが、建物の一軒一軒まで把握しているわけではない。

また人の物覚えというのは心もとないもので、今あれが建っている場所には何があつたかと訊かれると、もうわからなくなっているのが常だ。

首をかしげる政五郎に、親方は言った。

「形の上では火除け地ひよつてことになってたけども、それは地主が地主連に掛け合つてそうしてもらつたんで、実はありや忌み地いみちでしょ。嫌われていたんですよ。差配さばいさんの手前、大きな声じゃ言えないし、親分もあたしから聞いたなんて言わねえでくださいよ」

薄気味悪い話を消そうとして聞き調べているのに、行きたくない方角にばかり誘われるようで皮肉ではあるが、忌み地と言われては聞き捨てならぬ。

「ぜんたい、何が忌まれていたんです？」

家鳴やなりがするのだと、親方は言う。

「あたしも先代の棟梁——だからうちの親父から聞いたんですがね。あの土地には何を建てても、風もないのに家が鳴つて気持ち悪くて仕方がねえ。誰もおちおち住んでいられねえといふんじ」

地主も往生していたというのである。

「あたしは頭の隅にそのことが引っかかってたんで、剛衛門長屋が建つたときには、へえと思いましたよ」

こういう噂は、時が経つたからというだけで消えるものではない。さては地主が代わつたかと、政五郎はまた歩いて調べた。果たせるかな、凶星ほんせいだった。

先の地主は胆沢屋いさわという薬種問屋やくしゆもんやだった。お店は本郷ほんじやうにあるという。政五郎は納得した。本所深川あたりには薬種問屋は数がない。土地が湿気しづめているせいだろう。胆沢屋は元は「伊沢」と書いたのだが、熊の胆くまのいを使った独自の薬があつて財をなしたので、屋号の字を変えたという由緒よしある古店ふるだなだというから、もともとこの地にあるお店なら政五郎が知らぬはずはなかつた。

今の地主はと言えば、とある旗本はたもとだった。江戸の町では、金銭で土地が売買されることは、ごく少ない。だいたい、互いの便のいいところを交換して取引される。その場合、一方が商人で一方が武家ぶけということも珍しくはなかつた。

剛衛門長屋の場合も、胆沢屋は土地を当の旗本に売つたのではなかつた。これは要するに持参金で、胆沢屋の娘が旗本に嫁ぐ際に持つて行つたのだ。献上である。

せつかく左次郎が気を遣っていたのを無駄にはできないから、政五郎はこれらの方を、手取り早く剛衛門長屋の差配人から聞き出したのではない。またそれでは、本當のことが伏せられてしまう懸念も少し感じたから、遠まわしに遠まわしに、搦め手から攻めて聞き集めていった。

政五郎に語る人たちは皆、事実の一部を知ってはいるが全部は知らず、知っていることについても遠慮がちだった。それだけ、剛衛門長屋のある土地にまつわりついた「忌み地」の謂れは、根深いものであるのだ。調べてみると、そこが空き地になったのは、十五年前のことだとわかった。

娘の持参金に、そういう土地をぶら下げてゆく胆沢屋の肝は太いが、剛衛門長屋の差配人の身元を探ると、どうやら胆沢屋の縁者であるらしい。してみると、胆沢屋はお荷物<sup>お荷物</sup>の忌み地と全く手を切ったわけではないのだ。

今の地主のお旗本は、ご多分にもれず内証が苦しいのだろう。でなければ、そもそも商人の娘を妻に迎えるわけもない。胆沢屋は、娘の嫁ぎ先の貧乏旗本にねだられて、仕方なしに剛衛門長屋を建て、地代と店賃があがるようにお膳立<sup>ぜんだ</sup>してやっただけなのかもしれない。

では十五年前、この土地で何があったのか。何を建てても、家鳴りがして困り果てたというのだから、上物はそれ以前にも何度か建て替えられたのだろうし、だとすると、因縁の素はさらに年月を遡<sup>さかのぼ</sup>らなければ見つからない。またそれは、胆沢屋の内側にある事情に決まっている。今の今起こっている出来事でも、大店や古店の家の内のことは探り出しにくいのに、十五年か

ら昔となれば、これはさらに手強い難問だ。

政五郎はこれ以上の深追いをやめようと思った。骨を折って調べたところで、吉三の慰めとなる事柄が出てくるわけもなからう。それぐらいなら、左次郎と一緒に頭をひねって、もつと吉三のためになりそうな昔話を作り上げる方がいい。

ところがである。

こうした古い封印話は、こつちがいくら蓋<sup>ふた</sup>をしようと思っても、蓋の方から開きたがることがある。蓋は蓋の身で、長く口をつぐんできたことに疲れているのだろう。

政五郎は、お役目や調べ事に関わることも、本當に他聞<sup>ほか</sup>を憚<sup>おそ</sup>る場合を除いては、よく古女房に話をする。剛衛門長屋のことでは愚痴もこぼした。参った参った、知れば知るほど気が滅入るぜ、子供の影は、まったく幽霊であるかもしれないねえ。胆沢屋ではその昔、影の主の子供が不幸な死に方をしたとかいう因縁があるんじゃないかねえのかな、と。

それがふと、家にいる手下のの耳に入った。

この手下が只者<sup>ただもの</sup>ではなかった。

といつても、腕っ節が強い大男でも、はしこい切れ者でもない。歳はまだ十ばかりの子供である。名を三太郎<sup>さんたろう</sup>という。身寄りのない子で、政五郎夫婦が手元に引き取り、これまでずっと育ててきた。なかなか可愛い顔をしているのだが、広い額がでんと張り出しているの、自然に「おでこ」という通り名がついた。政五郎も、よほど改まったときでない、わざわざこの子を三太郎などとは呼ばない。おでこ、おでこ呼び捨てている。

このおでこ、尋常でないほどに物覚えがいい。  
さて政五郎には、大親分と仰ぐ人がいる。その昔、回向院えこういんの親分と親しまれ恐れられた茂七もしちという岡っ引きだ。政五郎は彼に薰陶を受け、彼の縄張を受け継いで今日ここにある。親代わりであり、恩人だ。

すでに米寿を迎えた茂七は、政五郎夫婦のもとでのんびりと隠居暮らしをしている。さすがに足腰は弱ったが、頭の方はまだまだしっかりと澄んでいる。政五郎のお役目に口出しすることはないが、手下たちの躰しんげには目を光らせている。

この茂七大親分が、おでこを気に入っているのだ。で、どちらが言いだしつぺなのかはわからないが、ある時から、大親分の語る昔の捕物話を、おでこが片っ端から覚えてゆく——という面白いがご苦労な試みを始めた。

「昔のことを聞き覚えておけば、何かの役に立つこともあるかもしれません」

まわらぬ舌で、おでこは言う。

「おんこちしんといふものでござんす」

という次第で、おでこの大きなおつむりのなかには、大親分の語った昔話がぎっしりと詰まっているのである。

彼はそれを、思うように再話することができる。ただ、ぜんまい仕掛けのからくり玩具おもちゃと似ていて、一度動き出してしまうと最後まで止まらない。途中で遮ると最初に戻らなければならなくなる。そのコツさえわかってしまえば、実に便利な仕組みだ。

さて、政五郎から女房へ、女房からおでこへと、切れ切れに伝わった胆沢屋の忌み地の話は、おでこのおつむりのどこかに引っかけた。彼はその因縁話を、大親分から聞いて知っていたのである。

そこでその晩の夕飯が済むと、おでこはてこと政五郎の座敷へやってきた。吉三を震えあがらせた影踏みかげづみの十三夜から十五夜を過ぎ、月は今度は徐々に痩せていつて、その夜は新月だった。つまりそれだけの日数を、政五郎はほうぼう聞き歩いて過ごしたことになる。

「とんだ無駄足だった。最初はなからおめえに聴けばよかつたんだな」と、思わず苦笑をもらしてしまった。

おでこは政五郎の前にちんまりと座ると、両手を膝に、目も鼻も口も顔の真ん中にぎゅっと近寄せて、世にも珍妙な表情をした。笑ってはいけない。これはこの子が再話をするためにぜんまいを巻いているのだ。

「事がありましたのは、にじゅうにねん前でござんす」

用意が整うと、おでこは始めた。

政五郎も神妙に手を膝に置いている。脇には女房が座っている。

「北六間堀町のあの地所には、胆沢屋さんの別邸がござんした」

裕福な商人が別邸を持つのは、格別珍しいことではない。妾宅しよたくではなく、あくまで別邸だ。家人や奉公人の骨休めや、病気の療養に使われる。二十二年前なら本所深川は今よりよほど鄙ひなびていたから、本郷にお店のある胆沢屋にとつては、ちょうどいい土地柄でもあったろう。

「そこには胆沢屋三代目のご主人の先妻が住んでおられました」

四代目主人の母親とか、先のお内儀さんという表現ではなく、「先妻」というもつて回った言い方には事情があるのだろう。が、こういうとき性急に聞き返してはいけぬ。おいおい語られるのだから。

「先妻はお結さんというお名前でございます」ぼやぼやした眉根をよせて、おでこは続ける。

「このお内儀さんには、嫁して五年、お子がありませんでした」

胆沢屋三代目の主人夫婦は、跡継ぎに恵まれなかったということだ。

と、ここで突然おでこのちんくしゃ顔が素に戻った。子供らしい目をぱちりと見開いて、「お子に恵まれないご夫婦は、もらい子をするといい、そうするとすぐに授かるといいいますのは本当でございますか」

政五郎夫婦に問いかけた。

岡つ引き夫婦は顔を見合わせた。女房がひとつうなずき、おでこに答えた。

「よくそう言うわね。もらい子が呼び水になるとかって」

はあ……と、おでこは気の抜けたような返事をした。そしてまた目鼻を寄せる。

「ですから胆沢屋さんはもらい子をいたしました。孤児で、歳は三つの女の子でございました。名をお文と申します」

「女の子か？ 後継ぎがないからもらい子をしたのには？」

政五郎の疑問に、女房がちよいと袖を引いて答えてくれた。「あくまでも、赤子を授かるた

めの呼び水のもらい子なんだから、女の子でもいいと思っただんじやないかしらん。なまじ男の子だと、後でかえって面倒になりかねないじゃありませんか」

おでこはまだ顔の真ん中に道具を寄せている。今のやりとりで再話を遮ってしまったかと、政五郎はじつと彼を見た。

「お文が来ましても、胆沢屋さんにお子は授かりませんでした」

と続いたので、ほっとした。

「一年経ち、二年経ち、お文は五つになりました。それでもお子は授かりません。そうこうしているうちに、胆沢屋さんの三代目には他所に女ができました。その女に子ができました。男の子でございます」

胆沢屋は古店なので、親戚縁者も数多い。うるさいのが揃っていた。外腹の男の子ができたという事態に、彼らは鳩首して、その男の子を胆沢屋に迎えることを三代目に勧めたという。

「ところがこの女というのがなかなかの剛の者で」子供らしい甘い声でおでこは続ける。「子供を手放そうといたしません。そこで胆沢屋では、お結さんを離別して家から出し、女を後添いに入れるという手を打ちました」

乱暴なやり方だ。胆沢屋の三代目はよほどその女に惚れていたのか。あるいは、外の女の存在がなくても、子宝に恵まれぬお結を離別しようという動きが、前々からあったものなのか。

「離別すると言っても、世間体を憚れば、無一文で叩き出すわけには参りません。そこで胆沢屋さんは別邸を建てたのでござんす」

なるほど、政五郎はうなずいた。

「別邸には、お結さんだけでなく、お文も一緒に暮らすことになりました」  
跡取りができて無用になった「呼び水」のもらい子と、跡取りを産めなかつた先妻が、まとめて別邸に追放されたのだ。

「気の毒に」政五郎の女房は顔をしかめる。「ひどいことをやったもんだわね」  
昨日までのお内儀さんとお嬢さんが、今日を限りに赤の他人、胆沢屋のお荷物扱いを受けるのだ。暮らしに不足がなければいいというものではなからう。

商屋のお内儀というのは、内々のことをすべて取り仕切る立場にあり、金の出入りも握っている。お店の金蔵と手文庫の鍵を根付さながらにじやらじやらぶらぶら下げて、一同に睨みをきかせる怖い存在だ。そんな一段も二段も高いところから引き摺りおろされ、用なしの居候として別邸に追い払われる――

お結が温厚な女であつたにしても、無念でないはずがない。仮に気の強い女であつたなら、その怒りと恨みはいかほどのものだったか。政五郎の胸に、もやもやと嫌な予感が立ち込めてきた。

「ほどなく、お結さんは様子がおかしくなりました」

おでこはヘンテコな顔のまま再話を続ける。

「昼日中から大酒を飲み、目ばかりきらきらと底光りさせて、少しでも気にいらなことがあると、大声で喚く、騒ぐ。おまけに、それまでは可愛がついていたお文を、些細なことでこっぴ

どく叱りつけてはいたぶるようになりました」

やっぱりそうだったか。手近にいるか弱い者。逆らうことのない幼子。そして、役に立たなかつた「呼び水」のもらい子。お結にしてみれば、お文のすべてが面憎く思えたのかもしれない。大人の勝手な理屈だ。が、お結は、他には持つていくことのできない鬱憤を、すべてお文におつかふせる。お結にしてみれば、自分の不幸の素は、すべてこの子であるように思えてしまふ――

「ごめんさいよ、おまえさん。あたし、この話を聞くのは嫌だわ」

古女房は小声で言つて、裾をはらうとそそくさと座を立つた。政五郎は止めなかつた。障子が開き、また閉じる。おでこはそれを見送つて、ふと顔を緩めて政五郎に言った。

「親分」

「うん、何だ」

「私もこのお話は嫌いでござんす」

思わず漏れたという本音だった。

「よくわかる。辛い話を諳んじさせて、すまねえな」

「いいえ、それが私のお役目です」

おでこは、まだ喉仏のないつるりとした喉をごくりとさせた。

「でも、このお話が本当に嫌なところにさしかかるのは、これからでござんす」

よく見れば、おでこの三太郎はうつすら涙目になっている。少しでも彼の諳んじる部分を少

なくしようと、政五郎は尋ねた。

「どれほどひどく折檻せうかんされても、お文は逃げ出すことができなかつたんだらうかね。五つの子じゃな」

それほどの知恵も、行くあてもなかつたらう。

「別邸にだって、女中や小女ぐらいたんだらうが、誰もお結を止められなかつたかな」

胆沢屋の者どもには、お結に対する後ろめたさが、最初はなからあった。お結が気が触れたようになり、お文をいたぶり始めると、その後ろめたさは恐怖に変わった。お文を助ければ、行き場を失ったお結の怒りと恨みの矛先が、今度は自分たちの方に向かつてくる。

お文はここでも、一人ですべてを引き受けさせられることになったのだ。いや、そのためにこそ、お文は別邸に送られたのかもしれない。

「お文は別邸から出られず」と、おでこが言った。再話の折のちんくしゃな表情に戻っているが、ぜんまいの解けが遅いのか、口調がゆっくりになってきた。「いつもいつも、独りぼっちで遊んでいたそうでござんした」

歌をうたうのも一人。鞆たづをつくのも一人。ままごと遊びも一人。

「こん、こん、こん」

おでこが急に節をつけて言ったので、政五郎は伏せていた顔を上げた。おでこは右手を持ち上げて、指で狐の形をこしらえている。口をばくばく開け閉めして、こんこんと鳴くのである。

「こうして、影をつくります。私は親分とおかみさんに教えていただきました」

「影絵遊びだ」と政五郎はうなずいた。

「お文はこの遊びが大好きだったそうでござんすよ」

「それで——いつ死んだ？ それが二十二年前のことかい」

「いえ、お文が弱って死んだのは、二十三年前の冬でござんした。身体中、火傷やけどの痕あとだらけだったそうでござんした。お結さんが、火箸ひばしで折檻せうかんしていたようで。ですからこの件は、外には漏れなかつたのでござんすね」

女房がここから逃げ出してきてよかつたと、政五郎は思った。

お文というはけ口を失ったお結は、それからいよいよいけなくなつた。鬼女きじよさながらに暴れまわるので、胆沢屋では別邸べつていに座敷ざしき牢を造り、彼女を閉じ込めた。

「これがおかしなお話なのですが」おでこはちんくしゃな顔のまま首をかしげる。「お文を殺めてしまった後、お結さんには何かしら神通力のようなものが備わつたそうで」

「神通力？」

「はい。何か後ろ暗いことをしている者がいると、たちまちそれを見抜くのだそうでございませう。たとえばお店の者がお金をくすねたりしますと、すぐにそれと暴きます。悪いことではないにしろ、誰かが隠し事をしていけば、それも見抜いて大声で言います」

それを封じるためにも、座敷牢が要つたというのである。

そして、お文が死んでちょうど一年後、お結も死んだ。座敷牢のなかで、お文を折檻する際

に使つたであろう火鉢に顔を突っ込んで、自ら焼け死んでいたというのである。但し、あまりに異様な死に様だったので、今度の件は噂になり、外にも漏れた。だからこそ、当時茂七が調べに乗り出し、一連の事情を知ることになったのだった。

「胆沢屋さんは別邸を取り壊し、いったん更地にいたしました。しかしその後、そこに何を建てても家鳴りがします。まるで女の悲鳴のような音がしたそうでごんすよ」

因縁話の仔細はわかつた。しかし、政五郎は心に浮かんだ他の存念に気をとられていて、すぐにはおでこの話が終つたことにさえ気づかなかつた。

火鉢に顔を突っ込んで焼け死んだ女。

その女は生前、なぜかしら他人の悪事や隠し事をよく見抜いたという。  
火鉢。

「親分」と、おでこが呼びかけてきた。政五郎はまばたきをして彼を見た。おでこは政五郎の腕を見ていた。そこには鳥肌が浮いていた。

「ひとつ教えてくれ、おでこ」腕をさすりながら、政五郎は言った。「別邸のあつたところに起きた変事は、家鳴りだけだったかい？ 大親分は、他にも何か聞き知っておられなかつたか」

「何かと申しますと」

「出たんじゃねえのか。そこにはさ」誰に盗み聞きされるわけでもないのに、政五郎は声を落とした。他でもない、この自分の口が、「出た」などと言うのが気恥ずかしかつた。

「出た？」

「幽霊とか——おかしなものが」

もつと詳しく言うこともできる。つんつるてんの着物を着て、骸骨のように痩せ衰えた、ざんばら髪の女の幽霊だ。それが火鉢のそばに立っている。火鉢のなかから灰神楽に乗つて現れ出て、家のなかを歩き回る。悲鳴のような家鳴りとは、その幽霊の叫び声だ。

政五郎はそれを知っている。この座敷の、この縁側を、その幽霊が歩いて通り過ぎたことがあるからだ。あの火鉢の、灰神楽の一件だ。忘れようにも忘れられない。

あのとき、痩せさらばえた女の幽霊は、政五郎の方を振り返らなかつた。それで幸いだつた。もしも目にしていたのなら、その顔はきつときつと、無惨に焼け爛れていたことだろう。鬼女と化して果てたお結の顔だ。

「そのような噂があつたことはあつたそうでごんすが」

おでこは、政五郎のうろたえぶりに驚いている。

「大親分は直にご覧になつたわけではなく、確かな話ではないということでごんした」

「俺は確かに知っているんだ」と、政五郎は言った。「いつかおまえにも話してやろう」

翌日、政五郎は真つ直ぐ押上村の照法寺へ向かつた。

ここの住職は古い馴染みだ。政五郎とは暗く遠い昔からの腐れ縁である。ただこの腐れ縁には血が通つており、その血はけつして濁っていない。

岡つ引き稼業をしていると、時に始末に困る物品が手元に残ることがある。気軽には捨てられぬ、凶事に関わった物どもだ。政五郎はそれをここへ持ち込む。相撲取りさながらの大男の住職は、黙って引き取り然るべく供養をして、大枚の金をとる。

先年の冬、そのようにして、政五郎は火鉢をひとつ、住職に預けた。

桐生町五丁目の平良屋という下駄屋で、おこまという女中が急におかしくなり、たまたま泊まりに来ていた主人の弟に斬りつけるという不祥事が起こった。幸い、斬られた側は軽い怪我で済んだが、女中は間もなく息絶えた。

おこまは純情な働き者で、主人の弟とのあいだに曰くがあつたわけでもなく、なぜそんな仕儀に至つたのかわからない。ただおこまは死ぬ前に、まるで灰神楽のような真つ白な息を吐き出した。またしばらく前から、彼女は女中部屋にある火鉢に見入り、まるでにらめっこをしているようであつたという。熾つた炭に水をかけては、わざと灰神楽を起こして。

不審を抱いた政五郎は、おこまが古道具屋で買ってきたという、その火鉢をもらい受けて帰った。そしてその夜、女房と二人、わざと灰神楽を立てて、何が起こるか試してみたのだ。

すると、現れたのだつた。ざんばら髪の女の幽霊が。

その正体は何なのか、灰神楽のなかに何が潜んでいたのか、火鉢にどんな因縁があつたのか、その時点では何もわからなかつた。ただ政五郎は夜明けを待つて火鉢を抱え、照法寺へと駆けつけた。話を聞いた住職は、フンと鼻を鳴らしただけで、眉毛一本動かさずに火鉢を受け取つた。

後になつて、政五郎は聞いた。供養が済むまで、この火鉢からは、夜な夜な白い人の顔のようなものが舞い上がり、あたりを飛び交つて小僧たちを脅かしたと。痩せかけて裸足の女の幽霊が、火鉢のそばに立つていたこともあつたと。

照法寺は、田圃に囲まれた小さな寺である。山門はいつも閉じているが、見た目は何の変つたところもない。ただ一度でも住職に会うと、この檀家はさぞかし大変だろうと、誰でも察しがつくようになっていく。ひとたび住職の顔を見て、声を聞いてしまった後には、鐘の音さえも威しつけるように低く聴こえる。

住職は一人で本堂におり、朝のお勤めの最中だつた。それが終わるまで、政五郎はおとなしく待った。ここで読経を聞いたことは何度かあるが、他所の寺では聞いたことのないお経ばかりで、宗派の見当さえつかない。だいたい、この寺のご本尊は、外から見える場所には安置されていなのである。本堂にある厨子の御扉も、常に閉じたままだ。

政五郎も大男だが、住職はさらにひとまわり大柄だ。肉の盛り上がった肩と猪首の上に、青々と剃りあげた頭が載っている。

政五郎は事情を話した。住職は平良屋の一件も、件の火鉢のことも覚えていた。

「あの火鉢はもう清めた」と、野太い声できっぱりと言う。「女の怨念も、人に憑いて惑わす灰神楽も消えた」

「それはよく承知してござんすよ」と、政五郎は苦笑した。「ただ、思いがけないことからあの火鉢の由来がわかつたんで、和尚と話したくなつただけだ」



「それはご丁寧なことだ」

次の言葉を継ぐのに、政五郎は少し迷った。「和尚、覚えているかね。おこまという女中は、あの火鉢の灰神楽を吸い込んで魅入られたとき、俺の過去を言い当てた」

——おまえは人を殺したことがあるな。

死んだ魚のような目で政五郎を見据え、おこまはそう言い切ったのだ。

政五郎の過去、岡っ引きになる以前の人生には、人の返り血が跳ね散っている。確かに政五郎は人殺しなのだ。だがそれを知る者は、今ではごくごく限られている。

それなのに、おこまはひと目で見抜いた。

「あれも一種の神通力だった。胆沢屋のお結も、お文を手にかけて後、他人の罪や嘘をよく見抜いたというんだよ。なあ和尚、そんなことがあるもんだろうか」

顔の真ん中に鎮座する、作り物のように立派な鼻から太い息を吐き、住職は本堂の天井を仰いだ。煤すすけてくすんだ装飾品や蒔絵まきゑが、頭のすぐ上にまでぶら下がっている。そういえば政五郎は、これらの謂れや由来も知らぬ。

経を読むときのような響きのある声音で、住職は言った。「人殺しは人殺しに見える。その眼のある者には」

「あの時も、あんたはそう言った」

「人を殺めるなどという大罪を犯す者はな、岡っ引きよ」と、住職は政五郎を見おろす。「その罪と共に、人ならぬモノへと変わるのだ。人ならぬモノの棲すむか方なたへと渡る。そこでは、人

ならぬモノの眼が開くことがある」

「それが神通力の正体かね」

吼ほえるように、住職は短く笑った。

「何を言う。そんなものは邪眼に過ぎん」

政五郎はぞくりとした。追いつきをかけるように、住職は言った。「おまえにも、その眼が開いた。だから岡っ引きなぞやっておるのだろう」

そうかもしれない。表向きはなんとか取り繕繕っているにしても、自分の芯しんには罪が凝り固まっている。

「それでどうする。この寺でも、影を引き取るわけにはいかん」

政五郎も、剛衛門長屋からここまで、お文を連れて来ることはできない。火鉢の時と違って、いわば依代よりしろとなる物が何もないのだから。

「どうしたらいいだろう。お文の魂は、ずっと迷っているんだろうに」

「お文は迷ってなどおらん」

きっぱり言われて、政五郎は当惑した。

「迷ってないわけがあるか。あの子はまだ、胆沢屋の別邸があったところにいるんだ。建物がないうちは、ずっとひっそり隠れていたんだろう。剛衛門長屋が出来て、子供らが大勢遊ぶようになったから、その声に誘われて、やっと姿を現したんだ。何とかしてやらないと」

「だからお文は迷っておらんと言うておる。咎とがなくして死んだ幼子おきなご。御仏みほとけがとうに導いてくだ

すった。どうして迷うはずがある」

「しかし——」

ゆさゆさと袈裟けさを揺さぶりながら、住職は立ちあがった。「影は影のあるべきところへ送ってやればよい」

本堂を出てゆく。首から下げた大数珠おびすずが、住職の歩みに連れてかちかちと鳴る。政五郎はぽかんと取り残された。

左次郎は、政五郎の長い話に、熱心に聞き入っていた。その眉間まげんに皺しわが寄る。再話するときのおでこと似たような表情になっているが、しかしおでこのそれのような愛嬌あいきょうはない。ただ悲しみと苦しみと、深い同情が刻まれている。

「可哀想に」

呟つぶやいて、目尻めすぢを拭ぬぐった。涙ぐむと、左次郎は急に、歳よりもなお老けて見えた。

「どうしてやったらいいものか、私も考えあぐねているんですよ」政五郎は正直にそう言った。

「また和尚がわけのわからんことをいうし。ああしてお文が出てきているのに、迷ってはおらんなどと」

照法寺住職のあの言い草には、政五郎は今でもちよつと気を悪くしていた。

左次郎は背もたれに寄りかかったまま、自分の左右の手を動かし、指と指を組み合わせて、あれこれと影絵遊びの形を作っている。橋、家、狐に漁師。

「こん、こん、こん」

左手でこしらえた狐を鳴かせて、じっと見つめる。と、そのうるんだ瞳ひとみが晴れた。

「親分、そうですよ。和尚様のおっしゃるとおりですよ。お文は迷っちゃいません」

急に明るい声をだす。

「あんたまで、どうしたんです」

左次郎は身を乗り出した。「迷っているのはお文の魂たまじゃなく、お文の影です。お文が仏様のおそばへ行ってしまった後、この世に取り残されていたあの子の影ですよ」

ほんの一時だが、政五郎は左次郎の正気を疑うような気持ちになった。しかし、そんな政五郎の腕をつかんで揺さぶりながら、左次郎は言い募る。

「お文は胆沢屋のお屋敷に閉じ込められて、いつも一人で遊んでいたんでしょう？ 影絵遊びが大好きだったというんでしょう？ あの子の遊び相手は、あの子の影だったんですよ。お文には、影という遊び相手がいたんです。きっとそうに違いはない」

しかしお文は死んだ。西方浄土へと渡り、今では何の苦しみもない。

お文は一人で逝いってしまった。お文の影は、この世に置いてけぼりになってしまった。そういうことか。

「そうですね。だから影だけが出てきたんだ。二十年もの長いこと、淋しく一人ぼっちで隠れていた。それがようやく、剛衛門長屋の子供らの遊ぶにぎやかな声に引き寄せられて、仲間に入れてほしくて出てきたんです」

政五郎はまた、背中のあたりがひやりとするのを感じた。左次郎は、目尻に涙を溜めたまま笑顔になっている。

「和尚様のおっしゃるのも、だから筋が通っているんです。影は影のあるべきところへ送ってやればよい。それは、そういう意味なんですよ」

「あるべきところって」

「嫌ですよ、親分」泣き笑いで、左次郎は政五郎の肘をびしやりとぶった。「お文のそばに決まっているじゃありませんか」